

美保関隕石物語

松江市美保関町 松本 優

第一話

1992年（平成4年）12月10日夜9時の出来事である。

その日は夕方より雷雨でみぞれまじりの天候だった。その中を大音響がとどろいた。

夕食が終わり台所で家内と、たまたま来ていた親戚の人と三人でくつろいでいたときのことである。あまりの大きな音にその来客は真っ青になり家内にとびついたのである。そのときは雷がすぐ近くに落ちたのだと思った。

私は懐中電灯を片手に近くの戸を開け外に出て家の周囲を一回りした。家屋の外見は何も被害はなかった。再び台所で雷雨の静まるのを待った。

やがて来客は帰り私は風呂に入り、風呂からあがったところに家内が私の寝巻きを片手に真っ青な顔で「お父さん家に雷が落ちた」と言う。私は「うそだろう」と言いながら急いで着替えをして二階に上がった。廊下はかなりの土ぼこりだ、部屋は真暗で何も見えない。懐中電灯で照らすと中は悲惨な状態である。電灯はこわれ落ちコードのみがぶら下がり、天井は壊れ大きな穴からみぞれが部屋の中に降っていた。

第二話

翌朝、目覚めて私の第一声は、「隕石ではないかなー。」だったと家内は云うが、私は覚えていない。

何はともあれ屋根の穴を塞がねばと、大工に連絡、又損害保険会社にも雷が落ちたことを報告し、修理する事の了解を得たが写真をとっておいてくれとのことで、私は屋根の上に上がり二三枚の写真をとった。

後にこの写真がとても重宝がられ、国内外の雑誌等に載せられることになった。

その日は一日中職人さんたちのほか、近所の人達が雷が落ちたそうだと、見舞いがてらものめずらしそうに訪れた。

夕方五時ごろ隣のおじさんが、「雷がおちたー？」とやってきた。私と家内で「ここに雷が落ちたのよー」と懐中電灯で床下を照らしながら、家内がせつめいしていた。

すると家内が「石があるよ。」これが昨夜やって来た隕石との二十時間経ってのご対面であった。とても重いキラキラ光るもののある、きたない石であっ

た。

第三話

隕石を持ち上げてみると見かけより重く感じた。手に持って2階の床の穴を見上げながらこれはひょっとしたら隕石ではないかと直感的に思ったのは不思議である。

その夜は、積み上げた畳の上に置いたまま三日目の朝を迎えた。とても出社できる状態ではないので休む旨の電話を会社に入れた。その折に隕石らしいものが見つかったと云ったのが日本海新聞に伝わり、松江の長田支社長（当時の女性）が取材に来たのが大騒動の始まりである。

その記者が取材後、島根県の日原天文台に問い合わせたことからインターネットで全国に広まったということである。その日（十二月十二日）の夕方から各社のマスコミが一気に押し寄せ、それと合わせて山陰天文協会、松江天文同好会、米子星の会の数人が夜八時半頃より我が家に集まり、汚れた石を囲み、体が震えてカメラのシャッターをなかなか切ることが出来なかったと後に述懐した人もいた。

彼らが退散したのが夜の十一時を過ぎていた。

後片付けを終え風呂から上がり、家内が床につこうとしたとき電話でNHKが取材を申し込んできた。「明朝でしょう？」と云うと「今からお願いします。」と云う。私は「明日にしてもらえ！」と云ったが、家内は引き受けたから……と一人で取材に応じ3日目が終わったのが午前3時を過ぎていた。

第四話

落下から四日目（12月13日 日曜日）朝六時前に目覚め、テレビのスイッチを入れたら、ニュースの時間で我が家の二階が映っていた。

これはえらいことになったと起き出し慌しい一日が始まった。電話でラジオの生放送のインタビューを受けるやら、各新聞社、テレビ局など続々と押しかけてきた。そして、なんと明日来ると聞いていた東京の国立博物館の室長・島博士夫妻が我が家にやって来た。夫君はもう引退しているとはいえ、隕石の本まで出している人であった。

島博士は記者団に確かに隕石と思うが確実なことは成分を測定品ければ言えない。と国立博物館へ持ち帰りを希望した。このとき初めて記者会見なるものに臨み、私の独断で国立博物館で測定分析をしてもらうことにした。厳重に梱包した隕石を島夫妻が持ち帰った後に、東京からワイドショーの取材が相次いだ。日ごろブラウン管の中で見ているレポーターが厳寒をものともせずこんな

ところまでやって来るのには驚いた。

夜になって一段落して夕食にしようと電気がまの蓋を開けたらなんと飯がない……

そう云えば島夫妻、新聞記者達が台所に避難してきたので、妻と娘がおにぎりを作って食べてもらったと云う。今からご飯を炊く元気は残っていないと云うので、ご飯抜きの夕食となってしまった。今でも島さんのご主人が「あのおにぎりはおいしかったなー」といつてくれるという。

飽食の時代たまにはひもじい思いをしてみると、食べ物のありがたさがわかるかもしれません。

第五話

隕石落下から7日目、東京からまたまた偉い人がやってくるという。村山定男さんだという、「えっ あの村山さん」「そうです、あの村山先生です。」と天文協会の人やや緊張した顔でいう。昭和44年アポロが初めて月に着陸、人類が月に第一歩を踏みしめ時、テレビの解説者で出演していた科学者の一人だと記憶していた。その村山さんが「隕石の神様」と言われていることをそのとき知った。

村山さんご一行（3人）の中にはこれまた天文写真家で有名だという藤井旭という人もいた。数々の天文書、雑誌には氏の名前が必ずあるというほど有名な人。

そのような人達が来たからもう大変、天文協会、天文同好会、星の会の人達それに報道関係者達でごった返した。

落下の様子（方向・角度）等詳しく調査するため二階へ上がったたり一階の落下地点を調べたり、そのたびに全員が一斉に移動した。家内は玄関の靴を揃えがてらに数えたら50足あったから全員が二階へ上がっていった時、今度は隕石ではなく二階の床が抜けて大勢の人が降ってきたらどうしようと思ったという。

その後村山定男さんには何度か会う機会があったが、まったく偉ぶった様子がなく当時70歳位だったと思うがスマートで魅力的な紳士である。今はガンと仲良く付き合っておられると云っておられたけれど1日でも長く生きていていただきたい人である。

最終話

隕石落下騒動から連日大勢の人達の対応に追われていたが、年末となり入院していた父も退院、母は一時帰宅させて久し振りに一家揃ってゆっくりと正月

が過ごせるかと思いきや元旦から「見せてほしい」と何組もの人々が訪れた。そのような状況で 2 ヶ月が過ぎ、分析を終えた隕石が帰ってくる日これがまた大変、国立化学博物館の館長、次長、そして、分析に携わった研究室の室長の三人が特製の箱に何重にも包んだ隕石を手に入れた我が家にやってきたものだから報道関係者、天文関係者等で家の中はごった返した。その翌日は町の中央公民館で一回目の一般公開と講演会を行った。お堅い講演会には動員が難しいのが常だが、町の内外から聴講する人々が会場を埋め尽くしたのは驚いた。その日を入れて五日間の入場者が一万人を越えたと云うことであった。

落下二周年記念として家の前にモニュメントが建立され、県道から私宅へ下りる地点に「隕石落下地点」と看板が立てられた。今年の十二月で十一年になるが今でもモニュメントを見て記念写真を撮ったり、中には家の中を見せてほしいという人には案内したりしている。隕石が私共に大勢の人達との出会いを作ってくれた事が何よりの宝と思っている。隕石物語はひとまず終わりとしします。

===== エピローグ =====

今年平成 20 年 12 月 10 日で落下から 16 年を迎えることになる。

今でも時々訪問客がある。我が家の 2 階は 16 年間そのまま（修理した状態）できず跡の一部が見えるようにしている。訪問客には今でも説明するように心掛けています。

たくさんの人との出会いをもたらしてくれた隕石に、これからも続けられる限りお世話をしたいと思っている。

平成 20 年 7 月

（追記）

東亜天文学会総会が松江で開催されることが決まってから、この美保関隕石の話題をぜひみなさんに披露できればと思っていました。松本さんにお話したところ、いつもの笑顔で快くお引き受けいただきました。

先日、打合せのために久しぶりに美保関町惣津の松本さん宅に出かけました。松本さん宅の前には日本海が広がっています。その時は夜でしたので、沖にはイカ釣りの漁り火が並び、連日の猛暑ではありましたが、海からのそよ風は心地良いものでした。

美保関隕石が多くの方との出会いを作ってくれました。今でもそれが縁でお付き合いが続いています。2 年後の 20 周年の同窓会を今から楽しみにしています。

平成 22 年 8 月 松江星の会 安部裕史